

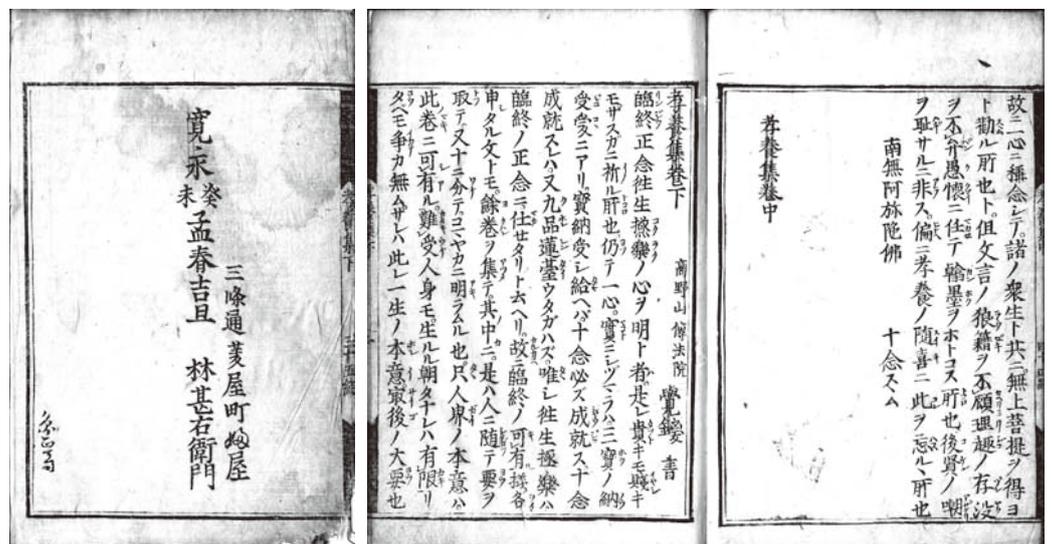
□第2回 8巻(第9~16巻) □

巻	ジャンル	収録書	作者等	年代
9巻	仏教 (臨終行儀)	孝養集(こうようしゅう・きょうようしゅう) 千代見草(ちよみぐさ) 四要篇(しやうへん)	作者不明(伝覚鑿(かくばん)作) 作者不明(伝日遠(にちおん)作) 関通(かんつう)・法岸(ほうがん)作	寛永20年 1643 宝永7年 1710 文化13年 1816
10巻	仏教 (往生)	女人往生章(にょにんおうじょうしやう) 贈貴族女性法語(ぞうきぞくにょしやうほうご) 大経五悪図会(だいきやうごあくずえ)	洞空(どうくう)編 超然(ちやうねん)作 照山(しやうざん)作	延享1年 1744 天保3年 1832 弘化5年 1848
11巻	仏教 (仏教一般)	孝子善之丞感得伝(こうしぜんのかんじやうかんとくでん) 彼岸状(ひがんじやう) 三世乃道歌(みよのみちうた) 潤家潤身(じゆんかじゆんしん)	直往(じきおう)口述、称阿(しやうあ)編 (作者不明) 推翁禅師(すいおうぜんじ)作 徳道(とくどう)作	天明2年 1782 文化15年 1818 文政11年 1828 江戸後期 ——
12巻	仏教 (放生)	商家繁栄・農家豊作重宝記(しやうかはんえい・のうかほうさく-ちやうほうき) 民家豊饒重宝記(みんかほうじやうちやうほうき) 放生歡喜艸(ほうじやうよろこびぐさ) 誠殺放生文(かいせつほうじやうもん) 放生勸進録(ほうじやうかんじんろく) 放生手引草(ほうじやうてびきぐさ) 法義家内示談(ほうぎかないじだん)	森住万願堂(もりずみまんがんだう)編 森泉万貫堂(もりずみまんかんがんだう)編 純称(じゆんしやう)作 鞍馬山某閨梨(くらまやまなにがししゃり)作 (作者不明)、玉水(ぎよくすい)画 諦忍(たいにん)作 浄満寺講師某(じやうまんじこうしなにがし)作	弘化2年 1845 嘉永1年 1848 文化13年 1816 天保7年 1836 嘉永4年 1851 嘉永6年 1853 万延1年 1860
13巻	語彙 (通俗辞書)	置辞訓解(じやうじくんかい) 授幼難字訓(じゆやうなんじくん) 童子要字海絵抄(どうじやうじかいしやう)	白雲居士(はくうんこじ)編 伊沢長秀(いざわながひで)編 (作者不明)	延宝9年 1681 享保12年 1727 江戸中期 ——
14巻	語彙 (通俗辞書)	寺子節用錦袋鑑(てらこせつようきんたいかがみ) 増補童字節用集(ぞうぼどうじせつようしゅう) 子供節用集(こどもせつようしゅう) 意見早引大善節用(いけんはやびきだいぜんせつよう)	(作者不明) 浅田恒隆(あさだつねたか)編 (作者不明) 為永春水(ためながしゆんすい)作	寛延4年 1751 安永5年 1776 文化3年 1806 天保14年 1843
15巻	俚諺 (俚諺一般)	漢語大和故事(かんごやまとこじ) 心学俗語(しんがくぞくご) 〈心学〉以呂波戒(しんがくいろはいましめ) 心体安楽丸(しんたいあんらくがん)	節遊燕(しとみゆうえん)作 小林高英(こばやしただかひで)作 小山駿亭(こやましゆんてい) (作者不明)	元禄4年 1691 文化14年 1817 文政7年 1824 江戸後期 ——
16巻	俚諺 (道歌等)	和漢詞徳抄(わかんしとくしやう) 鄙都言種(ひとごとぐさ)	一陽井素外(いちやうせいそがい)編 森島中良(もりしまちゆうりやう)作	安永8年 1779 享和2年 1802

死にゆく人と看取る人の心得

【第9巻『孝養集』】より

■近年、医療的処置による延命よりも、心身の苦痛を軽減しつつ人生の質の向上を重視した終末期医療(ターミナルケア)の観点から見直されている日本古来の臨終行儀書。そのうち、江戸時代に最も早く出版されたのが『孝養集』(覚鑿著と伝わるが未詳)で、鎌倉時代には成立したと見られ、その下巻で臨終行儀論を展開する。主に源信の『往生要集』(985年)に基づき、生前から臨終の心構えを持ち念仏を習うべきことや、病人の苦痛を和らげ最後の一念で往生するように全員で祈るべきことなど、死にゆく人と看取る人の心得を説く。



動物愛護史の貴重な資料

【第12巻『民家豊饒重宝記』より

■ 酷使のあげく、役立たなくなった老牛馬を生きのまま火あぶりにして生油を採取し、生皮を剥いで生肉を取るなどの非道を激しく批判した私家版。著者である大阪の篤志家・森泉万貫堂は、老牛馬を買い取り放生所を設けて天寿を全うさせる活動を続ける傍ら、本書を配布して放生の陰徳を世に訴え、民間の寄付を募った。現代も、売れないペットをゴミ同然に捨てる悪徳業者や、身勝手な理由で飼育放棄する飼い主が問題になるが、現代に連なる動物愛護史の貴重な資料である。



今も昔も変わらぬ人の心

【第16巻『鄙都言種』より

■ 貝原益軒談として紹介された「性急の損」に出てくる2人の乗船者の話。生憎の悪天候で航行が遅く、生来性急な1人は昼夜心を悩ましやつれてしまった。一方、温和な性格のもう1人は気にせず、快食・快眠で顔色も良いまま目的地に着いた。この間にイライラしても無益であり、自分の手に負えない事はただ天に任せておくが良い、こんな事で心を苦しめるのは愚かだと戒める。悩んでも仕方のない事に悩むのは、現代人も同じであろう。左頁の教訓歌「我ながら我も懐かし亡き人の分けて残せる形身（形見）と思えば」は、親の分身である我が身を大切にすべき事を教えた道歌（中務卿宗良親王御製）。



江戸時代庶民文庫 全60巻+別巻1 [A5判・上製] 全8回配本(半年に1回・各8巻程度) 予定

既刊 第1回 8巻(第1～8巻) 総2760頁 * 2012年11月刊 ISBN978-4-283-01002-4 揃定価(本体95,000円+税)
 第2回 8巻(第9～16巻) 総3050頁 * 2013年5月刊 ISBN978-4-283-01003-1 揃定価(本体108,000円+税)

学術図書出版
 発行 **大空社**
 〒114-0032 東京都北区中十条4-3-2
 TEL: 03-6454-3400
 FAX: 03-6454-3433
 URL: www.ozorasha.co.jp
 E-mail: eigyo@ozorasha.co.jp

・お取扱